

「食事をしなさい」

高校生の時、私は毎日アルバイトをしていました。通信制高校に通っていたから、そのような生活になっていた、ということかと思います。色々やりました。創作居酒屋のアルバイトに始まり、ハーツのような生協のお店のアルバイトもしました。生協のお店では、最初、レジ打ちで採用され、その後、鮮魚部門に配属され、次にグロッサリーという賞味期限の長い商品を扱う部門に移り、またレジ打ちに戻され、という、なんだか都合の良いように扱われた経験があります。ただ、そんな風に色々な部門を経験させられるのは、正社員のような働き方だと聞いて、こんな器でも十分に用いられたんだと感じ、ちょっと嬉しかったです。大学に入ってから、バンケットという、宴会や披露宴などで給仕するアルバイトをしたり、小学中学を対象とした学習塾で教えたりしていました。バンケットのアルバイトでは、結婚式の披露宴に携わることもありました。結婚式の披露宴。幸せな雰囲気満たされているはずですが、でもその幸せな雰囲気を支える労働者の側の様子は……。新郎新婦の容姿評価であったり、余興の完成度評価であったり、なかなか厳しい目を注いでいるんだな、と思ったのが、正直な感想です。だから、100%善意と献身で行われる教会での結婚式と披露宴を個人的にはお勧めしたいと思います。学習塾に関しては、自分は通信制高校出身のくせにですけど、「それでいい」って言った雇用者がおまして。ついでに、同じ会社でパソコン教室の講師もしました。学習塾で対応するのは、子ども達でしたけれど、パソコン教室の受講者の方々は、だいたいご高齢でした。訪問対応もしていて、御自宅にお伺いして講習もしました。ただ、違和感を覚えたのは、各ご家庭で使われているパソコンです。使いたい用途、たとえばネット検索とか、メールとか、文書作成とかに対して、明らかに分不相応な高機能パソコンを持っている方が非常に多

かったです。その道のプロがガッツリ使い込むような高機能・高価格のパソコンを事も無げに文書作成だけに使っていました。聞けば、「お店の人のおススメ」だったのだそうで。そういうところに、なんとなく社会の闇を感じたこともありました。もし、今、新しいパソコンをお求めの方がここにおりましたら、私の方まで一言お声掛け頂けると嬉しいです。神様の御言葉以外にも、適切なパソコンを取り次ぐことができますので、是非お知らせください。

と言うような、アルバイトをしてきましたが、多分、人類史とか、文明とか、社会とか、そういう大きな括りの中で、もっとも的を射ている金言を教えてくれたのは、創作居酒屋の店長さんでした。私が、16歳から働き始めた、創作居酒屋の店長さんは、こう言いました。「まあ、なんだかんだ言って、飲食の仕事は、無くならんと思う。美味しいものを食べたい人の願望は消えないから」と。多分、これは真理だと私は思います。私たちは、味覚がもたらす喜びからは逃れられない。美味しいは幸せです。その美味しいの積み重ねが、人生の充実度に影響を与えても、過言ではないと思います。

レヴィ・ストロースという文化人類学者が書いた『野生の思考』という本の中に、「料理」についての記述があります。彼は、構造主義という言語学から生まれた研究手法を用いて、人間が「料理する」ことの意味を考えました。私たちが料理する時、それは単なる栄養摂取を目的にしていません。もちろん、お腹が減るから食べるわけですが、もしお腹を満たすためだけなら、料理は必要ありません。料理は、切り分ける、熱を加える、味を調える、皿に盛りつける、などなどの所作を通して、「人間が自然に対して手を加え、自分たちにとって好ましい価値を生み出す行為である」と、レヴィ・ストロースは言いました。つまり、「料理」というのは、非常に身近であり、また長い歴史を持つ文化的活動だという事です。「文化的活動」というと書道とか、絵画とか、演奏とか、語学とかちょっと高尚なイメージがありますが、私たちが毎日している「料理」も十分に高尚な営み

なのです。

そして、「料理」が私たちにとって、単なる栄養摂取以上の意味を持つという、その理由として考えられるのは、「食事によって人と繋がる」ということがあるからです。誰かが料理したものを食べる。それだけでも、料理した人と自分との関係性が生まれます。食事会ともなれば、料理してくれた人、一緒に食べる人と広く繋がることができます。「料理」は、人間社会の中心にあって、人と人を繋げ、ここでも新しい価値を創り出すために一役買っています。もてなしの程度にもよりますが「接待」という営みによって、会社が売上を伸ばすこともそうですし、美味しい料理で誰かの胃袋を掴むことも、新しい関係性を期待するという点で創造的な行いの一つと言えるでしょう。「料理」は文化的、社会的営みであり、また手段です。人の喜びを生み出し、人と人を繋げ、人の願いを叶えるために用いられることもある。そんな「料理」を担う人は、だから、とても尊敬されるべきだと言えます。料理を提供する人は、人を幸せにする人です。生のままでは冷たく、食べづらく、味わいの少ないものを、手間と時間をかけて、温かくし、美味しさを加えて、盛り付けて、この世界に新しい価値を生み出している。ちょっと大袈裟な言い方ですが、「料理」には、そういう意味があるのだと思います。

イースターからしばらく経ちました。今日の聖書箇所においても、復活されてから、しばらく経った頃のイエス様のお姿が描かれています。復活されたイエス様は、あまり大きなことはしていません。復活と言う類稀な奇跡を経て、さらに大きな奇跡をお示しになるのかと思えば、決してそうではなく、イエス様は、道を歩く弟子たちに声を掛けたり、今日の聖書箇所のように食事を用意したり、ささやかな働きかけに留まっています。しかし、きっと、そのささやかな働きかけにこそ、大切な意味があるのだと思います。復活されてまで実現したかったこと。それが、今日の聖書箇所の12節にあるように、弟子たちに「朝の食事」を提供することであるとすれば、私たちは、その

食事について、深く知る必要があります。

さきほど、イエス様の「ささやかな働きかけ」と言いましたが、今日の聖書箇所にも、ちょっとした奇跡があります。イエス様がペトロさんたちを弟子にした時と同じように、魚が獲れない状況の中で、イエス様がアドバイスをすると、引き上げることもできない程の魚が獲れました。こうした奇跡には、イエス様が豊かな収獲、豊かな恵みをくださるという素朴な信仰理解が反映されています。大豊漁の後、1人の弟子が「主だ」と気付きました。「イエスの愛しておられたあの弟子」という少々含みのある表現で言われている弟子は、伝統的にはこのヨハネによる福音書を書いたとされるヨハネ自身であると言われていています。実際には、ヨハネによる福音書の著者は明らかになっていませんが、仮に「イエスの愛しておられたあの弟子」が、これを書いたヨハネ自身だとすると、非常に自己肯定感の高い人であったと言えます。私たちが臆せず「イエス様の愛しておられる、わたし」と言えるようでありたいと思います。さて、そんなイエス様の愛を信じて疑わない弟子の言った「主だ」という声を聴いて、おそらくは意図的に滑稽に描かれているペトロさんが、湖に飛び込んだことが報告されています。このペトロさんは、前にも一度、湖に落ちています。その時は、湖の上を歩いているイエス様の真似をしようとして、失敗していました。「イエスの愛しておられたあの弟子」に「自分は十分に愛されるに相応しいんだ」という信仰を学ぶとすれば、ペトロさんには主の御前において恥じらう謙虚さと、すぐに行動に移す思い切りの良さを学ぶことができるかも知れません。ただ、ペトロさんは湖に飛び込んだことで、大豊漁を持ち帰るという大仕事に携わることができなかったという失態も見せています。まあ、それも含めて、ペトロさんには親しみを感じる可言えるわけですが。大事な時ほど空回りしてしまうっていう。でも、そんな至らない人も、イエス様は愛してくださるのです。

9 節には、すでに食事の用意がしてあったことが書かれています。文脈からすると、これはイエ

ス様が整えてくださったと解釈できるでしょう。弟子たちのために、イエス様が火をおこし、魚を捌いて、パンを準備してくれていた。なんのことはない、イエス様が簡単な料理をされていたことが分かるだけですが、でも、なんだか温かい雰囲気が伝わってきます。弟子たちのことを思い、大切なことを教えたいと考えながら、イエス様は、この朝の食事を用意されていたのだと思います。イエス様が弟子たちに教えたかった大切なことって、では、一体何なのだろうかと思案して読んでみますと、これという教えは書かれていません。ここでイエス様は、神の国について説いたり、復活について語ったり、信仰について教えたりは、していません。ただ、弟子たちに食事を用意した。「パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた」だけです。

だから、今日の聖書箇所大切なメッセージは、「食事をしなさい」ということなのです。付け加えるなら、主の御前で、みんなで一緒に「食事をしなさい」ということです。これは、古来教会が大切に続けてきたことでもあります。聖餐式でパンと杯を分かち合うこともそうですし、愛餐会と言って、みんなで食卓を囲むこともそうです。茶話会でお菓子をつまみながら話に花を咲かせることも含まれます。キリスト教の教会から、「食事」と「料理」を取り除くと、その魅力は大きく損なわれるでしょう。「御言葉による礼拝」も、もちろん大切ですが、それと同じくらい、一緒に食事をすること、料理を通して繋がり合うことは大切です。主が聖別してくださった聖餐を頂くこと。信仰の友人が料理したり、あるいは手配したりしてくれた食事を分かち合うこと。教会がずっと大切にしてきた、これらの営みを、これからも感謝して続けていきたいと思えます。復活されたイエス様が、弟子たちに食事を与えた出来事に心を留めつつ、喜びをもって食事を共に味わう、そんな「食卓共同体」としての教会を、無理せず、楽しく続けて参りましょう。そして、日々感謝して頂く、私たちの料理や食事が、主によって祝福され、身体の栄養だけでなく、心や魂も満たされる、そんな豊かな恵みとなりますように。そう祈りたいと思えます。お祈りを致します。

神様。今日もわたしたちのために、尊い安息日を備えてくださり、ありがとうございます。あなたは、私たちに安息を与え、心と身体を整える時間を備えてくださいます。そして、私たちの肉の糧をも用意してくださり、私たちに美味しく料理すること、楽しく食事することの喜びを教えてくださいました。どうか、御言葉によって私たちを養うと同時に、食卓を共にすることによって私たちの絆を深め、喜びと励ましを得ることができますように。私たちの信仰を導き、教会における奉仕の業を、どうかお支えください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。